



参拝する人々



発行所

特定非営利活動法人
JYMA日本青年遺骨収集団
〒102-0076 東京都千代田区五番町2
番町バレス303号室
TEL03-6268-9939
FAX03-3239-0109
URL : http://www.jyma.org
e-mail : info@jyma.org
発行人 藤浪 達哉
編集人 山澤 健太

民主党政権下、初の終戦記念日
全国戦没者追悼式で近隣諸国に哀悼表明

今年で戦後六十五回目を迎えた八月十五日の終戦記念日(戦没者を追悼し平和を祈念する日) 全国戦没者追悼式で菅首相は、『アジア諸国の人々に対し多大の損害と苦痛を与え、深く反省し、犠牲となられた方々のご遺族に対し謹んで哀悼の意を表す』と、国難に立ち向かった英霊を辱め、会場を埋める日本人ご遺族よりも、隣国の干渉に迎合した。

全閣僚靖國参拝せず

首相は六月十五日の参院本会議で「靖國神社はA級戦犯が合祀されているといった問題などから、首相や閣僚が公式参拝をすることは問題がある」と述べ、菅内閣では自肅方針が打ち出され、首相も閣僚十七人も、その他の政務三役すら一人も靖國神社に参拝せず、

政府に記録が残る昭和六十年以降初めての異例の終戦記念日となった。

第二十四回

戦没者追悼中央国民集会

靖國神社外苑、大村益次郎像の元で第二十四回戦没者追悼中央国民集会が開催された。日本会議会長三好達氏、英霊にこたえる会会長中條高氏が挨拶され、漫画家のさかもと未明氏、ジャーナリストの笹幸恵氏、ノンフィクション作家の関岡英之氏らから提言がなされた。

三好会長は「民主党が進める永住外国人参政権付与や、夫婦別姓などの政策阻止を呼びかけ、日韓併合百年謝罪談話を糾弾し、どこの国の国益を見ているのか」と批判した。中條会長は、民族の滅びる三原則「夢を失う・拜金主義・自国の歴史を顧みない」を引き、この国は疲弊しており、「法により戦犯と呼ばれた人たちは戦犯でなくなつた。それを立法府にいる者がA級戦犯などは、この国は正義と秩序を失っている」と警世

を發せられた。

日本武道館で全国戦没者追悼式

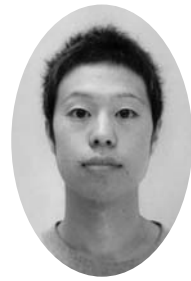
東京・北の丸公園の日本武道館では、政府主催の全国戦没者追悼式が執り行われた。

天皇皇后両陛下を正午前にお迎えし、国民儀礼の後、正午の時報と共に黙禱を捧げた。その後、天皇陛下がお言葉を述べられた。追悼式には六千名の方が参列し、最年長は九十六歳、最年少は四歳であった。



戦友と共に学生も呼びかける

温故知新、気付いたこと



山澤 健太

(日本大学四年)

毎週日曜日、靖国神社で戦争に行つたお爺ちゃん達のお手伝い。JYMA活動当初、私はこの社頭広報活動に意義を見出すのが困難だった。双方の活動協力を名分とするならば、支援協力して貰つていてという事実以外の、何か自分にとって大義名分となるものが欲しかった。それが何か分かつたのは昨年の中央集会であった。戦後六五年という月日の中で、我が国日本は関係諸国の意向の赴くまま、変貌を遂げてきた。終戦直後のGHQ草案、団塊の世代の日本立て直し、学生運動、そしてゆとり教育を施され平成世代。かつては祖国のために「強くあるべき日本人像」だったものが、私の世代では女子と似ても似つかぬ「草食男子」なるものがもては

やされる。このブームの裏には「争うことはサムイ、ださい」という現代の若者の思いを感じてならない。「自分は関与しませんよ、関係ありませんよ。こんな具合に。終戦記念日の八月十五日、諸外国の反応を気にする民主党政権は誰一人として靖国を参拝に訪れる事はなかった。成長著しい中国や韓国を刺激し、財政関係の悪化を恐れた上での政府対応であろう。「別に今が良けりや良いだろ。」現代の風潮、現政権の対応、双方の共通はこの一言であると思う。確かに争わぬことは得策かも知れない。自身の思いを押し殺して配慮するのも必要であると思う。だがこの先、日本が世界を相手に渡り歩くなら、最初から駒を捨てた様な態度、対応に出ているは、

物申されれば常にひれ伏す態度が身に付いてしまわないだろうか？ 学生の身分でこんなことを言うのも説得性に欠けるが、私たちは自身だけでなく、子供の将来や未来の国勢を見据えて現状を見極める必要が多々ある。「今が良ければ良い。」これは先の先人方が残してくれた贈り物があるからこそ言えた言葉であると私は思う。ならば私たちは将来のこともたちに向けて贈り物を作つてやらねばならぬ。世代という時の流れは繋がっているのだから。毎週日曜日、靖国神社。御歳九十歳を越える先輩方が今日も元気に国政に異議を申し立てる姿を見ると様々な感銘を受ける。その姿の裏には「戦争」を経験を得て培つた思いが込められている。「今が良けりや良い。」自分の国をきちんと自分達で築いていこうとする彼らは、決してそんなことは言わない。彼らのそんなスタイルは、社頭を手伝う私に、人間の器の大きさを教えてくれたのである。



靖国神社に参拝を

意見広告

今日の日本の平和と繁栄は、これを願って犠牲となられた多くの戦没者(英霊)のお陰であることを、忘れてはなりません。

英霊にこたえる会中央参加団体 旧戦友達 代表 佐藤博志

〒230-0017 神奈川県横浜市鶴見区東寺尾中台8-6 TEL&FAX : 045-571-6965

八月十五日、靖國神社での社頭広報を終えて



拓殖大学三年

山口 美朝

刺すような日差しの中、私は靖

國神社を目指した。駅からの道には重装備の警察官や機動隊の様な人がうろろろし、普段の市ヶ谷とは違った雰囲気を感じ出していった。

私が遺骨収集の派遣に初めて参加したのは二年前の今頃だ。その時はまだ戦史や英霊の方々のことはおろか、終戦記念日にすら興味関心を持っていなかった気がする。しかしシベリア抑留における死亡者の遺骨収集から帰ってきた九月の頭には、私は多くのことを知り、大きく考えがかわっていた。それから一年が経過して、平成二十一年の終戦記念日、靖國神社には行くこと行こうと思いつつ、結局帰省先から戻ることができな

った。

それから更に一年が経過した今、私は初めて終戦記念日の靖國神社を訪れた。いつも以上に人だにぎわっていた。今回私は、いつもお世話になってる英霊にこたえる会の方々が毎週行っている、靖國神社の社頭広報活動のお手伝いをするべく靖國神社に来た。

またもう一つの理由として、単純に終戦記念日に靖國神社に行つて手を合わせたいという私自身の思いもあった。それは遺骨収集によつて多くのことを知ったから思つたことであり、もし二年前に遺骨収集に参加していなければ、私は終戦記念日にここへ来ようとは思わなかつただろう。

広報活動をする前に、私は参拝

をしていくことにした。ここでも多くの人が列を成し、三十分近く並んだ末にやつと境内に辿り着いた。先輩達から教わつた、今では自分の中で当たり前となつている二礼二拍手一礼を行い、手を合わせた。色々なことを考えた。今まで行つてきた遺骨収集のこと、お迎えしたご遺骨のこと、遺骨収集を通して出会つた方々のこと、そして私と私の周りの人達のことだ。

八月初旬に、私はバイクで事故を起こした。幸い大事には至らず、相手方にも私自身にも大きな怪我はなかつた。当初は自分の体が頑丈だつたために助かつたのだと思つたが、ある方に、「きつと英霊が守つてくださったんだよ。」と言われ、そうなのかもしれないと思つた。そのことへの感謝に加え、最後に、「今の平和な日本を創つてくれてありがとうございませう」という感謝の念を込めて手を合わせた。

広報活動においては、気温三十度という猛暑の中でも、社頭に

立つ老兵の皆さんは弱音ひとつ吐かず、参拝の方々に力強く訴えかけていた。知らない人が見れば、この熱い中でどうしてそこまで頑張るのだらうと思つたのかもしれない。でも私は知つている。この人達には今伝えなければならぬ熱い思いがあるということだ。

知人に八月十五日に靖國神社に行つたと話すと、驚かれる事が多い。それはけつこう残念なことだ。恐らくこのような偏見を抱いてしまつたのは、間違つた認識があるからなのだろう。右翼、左翼が闊歩し、街宣車で道路を埋め尽くす。そんな光景を勝手に想像しているのではないだろうか。

僅かながらも英霊の方々のことを知る私は思う。ここ靖國神社で手を合わせることに、右翼も左翼もない。そこにあるのは日本のために亡くなられた多くの御霊への感謝や慰霊の気持ちだ。その方々のお陰で今日の平和な日本があるということ、私達は決して忘れてはいけない。

第二回フィリピン自主派遣

「知る」と

「伝える」と」



国士館大学三年
渡辺 志津加

今回で二度目の渡比である。この派遣は自主派遣であり、しかも女子学生三人という安全であるとは言いいれないものである。一人の責任が重い。これを踏まえ、勉強会や実施にあたった。

今派遣は、日系人会慰霊祭参加、慰霊碑巡拝・清掃、歴史資料館の「ダバオ慰霊碑マップ」作り、新しいJYMA奨学生の選出面接、JYMA奨学生との交流を目的として計画を立てた。決して不安がないわけではない、むしろ多いような心境で日本を発つ。とにかく、無事に任務を果たし、予定通り帰国することを念頭に置いた。

マニラにおいてはイントラムロスやリサール公園、アメリカ記念

墓地を巡った。物乞いをする人々の反対には高層マンションに住む人々の姿があり、貧富の格差や、混沌とした様子が手に取るようにしてわかり、日本社会と比較することで、複雑な気持ちになったのを覚えている。

今派遣の目的を果たすべくダバオに向かった。八月十五日の終戦記念日に日程が重なったため日系人の合同慰霊祭に参加でき、貴重な経験をさせていただいた。式典は日本人墓地や慰霊碑が建立されているミンタル墓地で約1時間、ミンタル区長や日系人代表の方のお話、献花などのプログラムに沿って行われた。予想以上に大規模なもので、戦争と平和への強い思い、願いが伝わってきた。日本人墓地や慰霊碑清掃への気持ちが高まった。

清掃は、合計六人で行った。今年度の奨学生はジョゼル・マリ・アン・アバスの一人なので、新奨学生候補者のカースティン、J P V A 職員のベンジーさんも手

伝ってくれ、スムーズに作業は進んだ。ミンタルには六つの墓地や慰霊碑・現地の方々の墓地が設置されており、管理者によって、守られている。一方、タモガンはダバオ市外から離れた山の見晴らしのいい場所に設置されている。一見きちんと整備・清掃されているように見えるが、苔や草が生えていたり、泥が付いていたりして、清掃後は見違えるようにきれいになった。険しい山、暑さ、マラリアなどの病気など多くの苦しみに耐え、日本のために戦った方々に敬意を表し、冥福を祈った。

滞在中、日系二世の田中愛子さんのお話をお聞きすることができた。戦前、戦時、戦後、日系人になってという四段階に分けて、初対面にもかかわらず親切に優しく説明して下さいました。戦時は想像し難い壮絶な試練があったこと、その後も心に大きな傷を持ったまま生きてこられたこと、家族の愛と絆・助け合いの精神が、日系人の方々の心の支えになって、逞しく

生き抜いてこられたことなどを教えて下さった。現代の日本人にはそのような家族間の人間愛はあるのかと不安になった。「現在思うことは？」という私たちの問いに「悩みはない。』どうして戦争があったのか？」ということをただ思うばかり」という言葉に心が動いた。戦争は終戦を迎えたが、戦争は心の中で今もお続けているということがわかった。と同時にこのような事態をきちんと後世に伝えていかなくてはならないと思っ

た。決して、教科書に載っていることが全てではなく、一人ひとりの戦争のかたちがあることを、理解し、伝承していく責任があるのである。
ダバオは決して大きな街ではないが、「かつての日本」を想起させるものが所々にあり、さらに親近感が沸く、「平和」に囲まれている私たちに何か問題を投げかけられた十一日間だった。今回の派遣でも様々なことを感じ、多くのことを学ぶことができた。

沿海地方派遣隊 参加抱負

1、派遣期間

平成二十二年

八月二十九日～九月十七日

2、派遣隊員

派遣人員 JYMA二人

藤浪達哉(法政大学四年)

中山亜理沙

(フェリス女学院大学)

3、収集地(埋葬地)

ロシア連邦沿海地方

ダリネレチエンスク地区

第85特別野戦病院ガルボフカ村

4、埋葬地概要

旧ソ連政府提供資料では二百五十二名分の死亡者名簿がある。土質は粘土質で水はけが悪い。

5、沿海地方派遣 抱負

沿海地方派遣にむけて



法政大学 四年
藤浪 達哉

この度沿海地方の遺骨収集に参加させていただくことになった法政大学四年の藤浪達哉と申します。派遣に参加するにあたり、抑留とは何であったのか、抑留中の状況はどうだったのか等をネットや書籍を通し勉強しました。しかし先日ヤゴタ会の藤井さん、茨木さんとの勉強会で抑留の体験をお聞きして言葉の重み、これから私が派遣へ行く場所の大切さを強く認識しました。

私は今までにガダルカナル、沖繩にJYMAの一員と参加しました。派遣から帰ってきて強く感じたことは「伝えることの大変さ」です。現地についてから考え方が変化した経験が多くあります。抑留者の方々に遠く及ばない情報量

ですが、より多く伝えられることを日本に持ち帰り、今後何が出来るか、抑留について受け答えが出来る日本人になれるよう、この派遣に望みたいと思います。

沿海地方派遣にあたり



フェリス女学院大学 四年
中山 亜理沙

九月一日から平成二十二年度ソ連抑留中死亡者遺骨収集に参加させて頂くことになりました。第二次世界大戦後に五十七万人以上の日本兵が何年も抑留され約六万人が亡くなったと言われるソ連抑留。未だに数多くの御遺骨が広範囲に及ぶ旧ソ連の地に眠っています。それに加えて、単純にロシアと言う国自体にも興味があるので是非行ってみたいと昨年から思っていました。

しかし、参加するにあたって強

制抑留について調べていたら、私は本当に無知なのだ実感しました。一般的には「シベリア抑留」と呼ばれていますが、正式名称は「ソ連抑留」なのだと言います。藤井弥五郎さんと茨木治人さんを招いて聞いた勉強会で初めて知りました。私が今まで本やテレビやインターネットなどで接してきた中で、一度も「ソ連抑留」とは載っていませんでした。このように学校教育やマスコミも間違った情報を流していることに、驚きました。

政府派遣は初めてなので不安もあります。実際に現地へ赴いて肌で感じ、全国強制抑留者協会や日本遺族会の方々も一緒なので貴重なお話を積極的に聞いて学んできたいと思います。そして、今年の夏は各地で記録的な猛暑が伝えられています。ロシアも例外ではありません。派遣団全員が無事に帰ってくることを前提に、一柱でも多く御迎え出来るように頑張っています。

史定 戦検

読者の皆様へお願い

特定非営利活動法人JYMA日本青年遺骨収集団理事長

赤木 衛

平素は、JYMA日本青年遺骨収集団に温いご支援とご協力を賜り誠に有難うございます。

先日来より本紙上にてお伝えしてきた通り、私どもは、青壮年層の手により、戦歿者慰霊の新しいカタチを模索すべく、今秋「戦史検定」開催を計画しております。

かつての大戦に戦歿された英霊の祭祀を、遍く担っていらした戦知派世代が、戦後六十五年の時間を経て、衰微し、戦後に生を享け、戦没者の命の代償として得られた平和と安寧を享受している我々の世代は、必ずしも慰霊の誠が充分とは言えないのが現状です。

昨今では、大学生でさえ、かつて日本が、米国を始めとする諸国と矛を交えた事実を知らないとい

う現象も現出しています。私どもは、戦後処理行政に携わっていくうちに、この国の分断された歴史にこそ、戦歿者慰霊の欠如の因がある事を、痛感しています。

JYMAは、「学生慰霊団」として発足し、目の前に戦歿者英霊のご遺骨が草むす屍のごとく放置されている惨状を目の当たりにし、「喫緊の問題」として遺骨収集に従事していることは、ごあんなの通りであり、その本質は、飽くまでも慰霊団体であります。

私どもが今回、この事業に着手しなければと思いついた端緒は、学生達が、ガダルカナル島の朽ち寂れてしまった民間建立慰霊碑清掃、ペンキ塗装などを行ない、やさやかな慰霊祭を催行したにも拘

らず、数日を俟たず、汚損させられるという事態が出来致した事に端を発します。

民間建立慰霊碑は世界各国の戦場跡に、戦友や遺族の手により建立され、戦歿者を偲び、かけがえない歴史を今に伝える碑です。しかしながら、現在、多くは、建立者の高齢化により、瘡痍の地を再訪するに与わず、朽ちるが儘に放置されている傾向にあります。

対照的に対戦国である米国側戦死者の慰霊碑は、多くが公の加護の元、整然と管理され、委託された管理人による清掃整備が成され、訪れる諸国の人々から見ても、真摯敬虔な慰霊の庭として機能しており、日本側の様な、建立しっ放しという様ではありません。

政府管理の在外慰霊公園は、適切に運用されていますが、かつて補給も敵わなかった広大な戦域を物理的に大別し、一地域一慰霊碑を原則とし、域内に複数の激戦地があっても、民間で建立する他なく、これらは管理が行届かず、朽

ちるに任せている現状です。

このようななか、民間建立在外慰霊碑の保持保全、先人達の激戦を国民共有の知識としていく為に行動を起こさねばと協議を重ね、近現代史研究会のご協力と、顧問の小田村四郎先生のご指導のもと、「戦史検定」による、戦史の共有、受検費用の収益を活用しての在外慰霊碑の保持保全を実施しようとして、今秋、上智大学において実施する運びとなり、第一回目の収益を、ガダルカナル島戦歿者慰霊公園再整備計画に充てたく準備を進めています。

このような社会的要請を感じ、政府の力の及ばない事業を、民間の手で、新しい形の真のボランティアとして、次代に引き継いでゆきたいと考えております。

そのためにはまず受検者の確保が緊要と考えました。

つきましては、私どもの意図するところをお汲み頂き、読者・支援者の皆さんに、受検申込みを賜れないものかと思慮し、見当違い

の誹りを顧みず、不躓ながらお願い申し上げるどころです。

本事業はメディアも注目しており、この新しい試みが果たして、受検会場を埋められるか、応募人数の多寡はと、鶴の目鷹の目で見目し、評価を下そうとしています。

しかしながら、実績のない状態からのスタートとなり、正直に申して受検者の確保に非常に難渋している状態にあります。

もとより不学無知なる身であることは自戒して承知しておりますもの、是非とも戦死者追悼事業の一環、以て「国を敬い国に頼らず」の精神で、民間の力を結集し、在りし日の先人の遺徳を次代に語り継いでいく新しい仕組み作りに御支援を賜り、参画する青年層を育成するお心積りを以て、何卒「ご教示・ご協力を賜りたく伏してお願ひ申し上げる次第です。

末筆ながら皆様の益々のご発展とご健康をお祈り申し上げます。

お申込は〇三(三三三九九)〇一六〇
<http://www.senshikentei.org/>

戦史検定で戦地慰霊碑保全 政府がやらないから 僕らがやります!

十一月第一期が行われる「戦史検定」(歴史とどうこう年鑑)の方のイメージがありますが、実行委員のお二人は大学四年生、携わったきっかけは？

中村 潤洋 さん

「戦史検定」の歴史とどうこう年鑑の方のイメージがありますが、実行委員のお二人は大学四年生、携わったきっかけは？

月間Will
 10月号
 漁火新聞
 9月1日号

漁火新聞
 9月1日号

「戦史検定」の歴史とどうこう年鑑の方のイメージがありますが、実行委員のお二人は大学四年生、携わったきっかけは？

中村 潤洋 さん



(中村 潤洋(左)氏)

平成22年(2010年)8月19日

戦争を知らない世代 関心持つきっかけに



遺骨奉還と日本軍守備隊が謝罪を繰り返したフィリピン・ミンダナオ島に建つ慰霊碑「戦史検定実行委員会報告」

挑戦しよう 戦史検定



記者会見を開き「戦史検定」をPRする実行委員会のメンバー (8月11日、東京駅近く)

「戦史検定」の歴史とどうこう年鑑の方のイメージがありますが、実行委員のお二人は大学四年生、携わったきっかけは？

史垂炎

「戦史検定」の歴史とどうこう年鑑の方のイメージがありますが、実行委員のお二人は大学四年生、携わったきっかけは？

本年11月に戦史検定事業実施!

受 検 者 募 集 中!

私達は戦死者の犠牲の上に整えられた平和と繁栄を享受しています。「慰霊」の前衛を担ってきた戦友や遺族らが遍く慰霊碑を建立し、慰霊を担ってきましたが、先輩世代の衰微により、今、世界各地でそれらが祭祀の主を失い朽ち寂れています。

先の大戦では世界各地で多くの日本人が亡くなり、その多くは、増援を送ること叶わず戦略的に見捨てられ死んでいった人達です。戦世の歴史的事実、多くの人の出血と涙に無関心を決め込むような事になれば、英霊達を更に見捨てる事になり、そうなれば、もはや日本は、文化的な国家の資格がないと考えますし、その成員としての我々青年世代の矜持さえも後世から謗られましょう。

本来であれば、これらは公の力により成され、国家の加護の下に置かれて然るべきなのですが、先の大戦を正しく評価する思考を停止してしまった国に任せようとばかりせず、この国の戦死者追悼のあり方に危惧を感じる我々の力で、次の世代へ史実を継承するため、在外慰霊碑の保全に取り組んで参りたいと思いたちました。しかしながら浅学非才な若輩の身故、手許不如意により活動の資を得る事業を模索しておりましたところ、問題を共有していた近代戦史研究会から、戦史検定を通じ、受検料の一部を充当することにより、その原資を得ようという発案があり、学生会議、理事会の審議を経、事業推進に邁進する運びとなりました。

本事業を成功裡に導くことが出来れば、青年世代が、先輩世代の残した慰霊の灯火を継承し、慰霊の新たな取り組みを世に示すこととなります。皆様の理解と協力をお願い申し上げ、この秋予定されています「戦史検定」を受検下さいますことを伏してお願い申し上げます。

社 頭 広 報 出 席 者

平成二十二年八月八日

旧戦友連

石橋聡 / 赤堀光雄 / 松下金三郎 / 鴨尾進 / 内藤寿美子 / 内藤寿美子 / 太田弘樹 / 菊地智太 / 榎田祐亮 / 松田由美 / 藤野茂

JYMA

宇井豊 / 赤木衛 / 五十嵐誠人 / 川又祐子

平成二十二年八月十五日

旧戦友連

石橋聡 / 赤堀光雄 / 松下金三郎 / 鴨尾進 / 田淵甲太郎 / 迺島哲郎 / 内藤寿美子 / 内藤寿美子 / 太田弘樹 / 吉木正 / 菊地智太 / 牛丸美奈子 / マルコ・アリ

プランティ

榎田祐亮 / 松田由美 / 藤野茂 / 山口隼人 / 上原善光 / 小島裕治

JYMA

宇井豊 / 赤木衛 / 山本沙織 / 川又祐子 / 宇都宮大起 / 中村貴洋 / 山沢健太 / 山口美朝 / 浅野夏子 / 肥田優子 / 藤浪達哉 / 安斎慶 / 黒澤崇 / 井上茂 / 井上明子

平成二十二年八月二十一日

旧戦友連

石橋聡 / 赤堀光雄 / 松下金三郎 / 鴨尾進 / 井上 / 内藤寿美子 / 内藤寿美子 / 太田弘樹 / 榎田祐亮 / 松田由美 / 藤野茂 / 内田二郎

JYMA

赤木衛 / 山本沙織 / 川又祐子

編 集 後 記

八月十五日、靖國神社は猛烈な暑さだった。神社には多くの人が集い、英霊に黙祷を捧げていた。この日は戦争について最も多くの人が考えさせられる日である。派遣に参加した私達JYMAはまだまだ少ない知識ながら、戦争を語る語り部としての意識を持つことが必要だ。「伝える」ということができる一人の、日本人である。総理大臣が靖國参拝せず、新しい国立追悼施設を創ると発言している。国家国民を大事にする気持ちを上辺だけでなく行動で表してもらいたいものだ。(藤)

一九六三年から始まった四十七回目となる全国戦死者追悼式が行われた八月十五日、私は帰省中でもあり、戦争を経験し、今は入院中である祖父にこれまでの活動を報告しました。祖父は話すことが出来ませんが、JYMAの活動を喜んでくれていると感じ、この喜びをもっと広げたいからと心から思いました。(葵)